

少人数指導・TT

少人数指導・TT部会

I 数学科TT

1. はじめに

本校数学科では、生徒が主体的に考え、それを説明することや、他者との協働的な学びを通して課題についての考えを深める授業づくりを目指している。このような学習では、生徒が主体であるが、教師の細やかな支援や指導が必要である。しかし、机間巡視や生徒からの質問に対する対応だけでなく、振り返りシートへの返信など多岐にわたり、教師が十分に対応できない場合も少なくない。

また、個別最適な学びの必要性が提唱され、個に応じた指導の充実を図ることが一層必要となっている。その際には、生徒自らが課題や問題を選択・決定、解決できる力が身につくように、個々の生徒のつまづきを把握して、支援や指導をすることが必要である。そこで、昨年度と同様に今年度も非常勤講師の人数の関係や、各学年の状況を考え、第1学年の授業において、TT指導を実施することとした。

2. TTの運用と利点

本校第1学年は各学級30～31人である。今年度の第1学年から生徒の定員数が減少したことで、生徒の様子を把握しやすい状態になった。しかし、個別最適な学びの1つとして実践している「単元レポート」の評価や、生徒が行う日々の振り返りシートへのコメントなど、授業者が授業外で時間を割いて行う業務が多かったり、Chromebookの操作の支援など授業内で個別に対応することが多くなり、状態は変わらない。そこで、今年度の第1学年でTTを採用し、T1は授業の構想と実践、T2は授業の支援と生徒の個別対応、「単元レポート」や振り返りシート、提出物などの評価や確認を行うこととした。このような役割分担はあるものの、T1とT2はそれぞれの役割における情報交換を授業実践の前後に行い、指導と評価の一体化を目指した。今年度の担当者は表1のとおりである。

表1 TT担当教員

	1A	1B	1C	1D
T1	水野	菅野	吉田	菅野
T2	吉田	三橋	柴	三橋

3. TTの運用の実際

T1とT2は授業前に打ち合わせを行うことで、授業

展開の多様な発想や方法、それらに対する授業内での指導方針を共有することができた。また、授業後にT1とT2が授業について振り返ることで、T1が把握していない生徒の取り組みの様子や実態をT2が伝達する機会とすることができた。

また、「単元レポート」をはじめとする生徒の提出物に関してはT2が時間をかけて確認・評価することで、業務の効率化を図ることができただけでなく、提出物の内容をT1とも共有することで、その後の授業改善にいかすことができた。



写真1 TT指導の様子

4. 今後の課題

今年度は30～31人をTTで授業展開することになったため、T1は授業実践に集中することができたが、T2との授業後の情報交換については毎回行うことができず、不十分であったという課題が残った。しかし、2人で授業づくりをする体制は、それぞれの授業力向上につながったとともに、「単元レポート」などで個に応じた指導にもつなげることができた。

来年度も、非常勤講師とのTTまたは少人数指導を行う予定であるが、年々非常勤講師の確保の難しさも課題として挙げられる。

TTまたは少人数指導を行う際に、それぞれの役割を明確にするが、TTの場合には授業展開をT1とT2が共通理解をし、授業前後に情報交換をすることで指導と評価の一体化を実現する形が望ましい。また、教育現場の働き方改革や個別最適な学びの実現を考慮し、TTや少人数指導を積極的に取り入れられる環境を整備したい。

II 理科TT

1. はじめに

日本は PISA2022 において高い評価を得た一方で、コロナ禍を背景とした「自律学習に対する自信」の不足や、理科の学びを日常生活に活用する意識の低さが課題として浮き彫りになった。また全国学力・学習状況調査の結果によると、「理科の授業で学習したことを普段の日常生活に活用できないか考えますか」という設問に対する肯定的な回答が 5 割以下であり、学びを生活と結びつける意識が十分に育まれていないことが明らかである。本校においても、生徒が学びを「分かる」「役立つ」と感じにくい状況が見られる。さらに、昨年度の課題として、生徒一人ひとりの学習状況をきめ細かく把握し、個別のサポートを充実させることが挙げられている。

これらの背景を踏まえ、本校では中学 1 年生の物理・化学分野の授業に TT を導入している。複数の教員による授業展開により、生徒一人ひとりの学びを支える体制を強化し、理科の内容を具体的かつ分かりやすく伝えることで、生徒の学びと日常生活を結びつけることを目指している。

表2 TTの担当者

1A		1B		1C		1D	
桑子	流石	桑子	流石	吉本	森重	吉本	丸澤

2. TTの実際

(1) 安全面で注意が必要な場面

火や危険な薬品を使用する実験では、T1とT2が支援する班を分担して巡視を行う。これにより、教師一人あたりの担当生徒数が減り、よりきめ細かい支援が可能となる。また、複数の教師がいることで死角が減少し、生徒の誤操作や危険行為に迅速に対応することができる。これにより、安全性を高めるとともに、生徒が安心して実験に取り組める環境を提供することができる。



写真2 T1注意点を説明、T2熱湯準備の様子
(2) 班ごとに実験を行う場面

T1とT2が協力して机間巡視を行うことで、生徒が疑問を感じた際にすぐ対応することができる。また、生徒からの個別の質問が他の生徒にも共通する課題である場合、全体で情報を共有することで学習効果を高めることができる。このように、迅速な対応と全体的な共有を組み合わせることで、授業の質が向上する。

(3) 自由度の高い実験をする場面

生徒が実験計画を立案し、自由度の高い実験を行う場面では、班ごとに実験内容が異なる場合がある。この場合、T1とT2が実験道具の準備や支援を分担することで、効率的かつ安全に実験を進めることが可能である。さらに、各班の進行状況に応じた適切な助言や支援を行うことで、生徒の主体性を尊重しつつ、円滑に授業を進めることができる。

(4) 説明をする場面

T1が全体に説明を行い、T2は生徒の様子を観察しながら必要に応じて支援を行う。T2の主な支援対象は、課題や説明の理解に困難を感じている生徒である。さらに、T1とT2が役割を交替することで、生徒は異なる視点やアプローチから説明を受けることができ、内容の多角的な理解が促進される。この方法により、生徒が抱える疑問や誤解を効果的に解消することが可能である。

3. 成果と課題

TTの導入により、実験器具を初めて扱う際の生徒への指導が効果的に進んだ。口頭や演示での説明では理解が不十分な生徒には、実際の操作中に修正点を直接指導することで、理解が深まる。また、実験技能のパフォーマンステストでは、二人の教師が同時に指導することで効率的に進行できた。予想や考察を行う際には、言葉で説明することが苦手な生徒や課題を把握できていない生徒に対して、きめ細かいサポートが可能となり、実験の進行もスムーズだった。さらに、T2がいることで、班単位で細やかな支援が行え、生徒自身に学習内容や方法を委ねる自主計画実験の実施をすることができた。実験の準備や後片付けを事前に T2 に依頼することで、授業内の活動時間を最大限に確保し、授業が連続する際にもスムーズに切り替えることができた。

課題としては、教師同士の事前連携が十分でない場合、TTの利点を十分に活かせなかった時間もあった。これは昨年度からの引き続きの課題でもある。対策としては、ワークシートに準備物や連携事項などの必要事項を書き込んで、事前に T2 と共有することが考えられる。限られた時間の中で専任教員と非常勤講師の連携をいかに密にするかは、引き続きの課題となった。生徒の個性や事前習熟度が多様化する中で、今後さらに TT の重要性が増すと予想され、授業方法の改善にはさらなる検討が必要である。

Ⅲ 英語科 TT

1. はじめに

令和2年度に小学校の新学習指導要領が全面実施となってから久しい。小学校での英語が必修となり、外国語教育の抜本的強化が図られている。一方で、令和5年度の全国学力・学習状況調査では、「英語の学習は好きか」という問いに肯定的に回答する割合は、小学生 69.2%、中学生 52.3%で、中学生の方が 16.9 ポイント低かった。本校1年生は、帰国生として英語圏に住んでいた経験のある生徒や、塾などで勉強し、実用技能英語検定を取得している生徒もいれば、英語の学習は学校の授業のみという生徒もあり、入学当時から英語学習への意欲や英語力の差が感じられる。すでに英語に苦手意識を持って入学してくる生徒も見られる。中学3年間で主体的に英語の学習に取り組むためにも、特に中学1年生での丁寧な指導が大切である。他者とのコミュニケーションに焦点を当てた指導が充実をすることはもちろん、個に応じた指導の機会を増やすこと、個々の振り返りを指導に活かすこと、生徒への声掛け等を丁寧に行うことなどが重要である。

少人数クラスに分けるのではなく、学級全体で授業を行うことで、生徒同士の教え合いやお互いを手本とする機会が増える。また T1 と T2 が複数の視点で一つのクラスを見ることで、個々の生徒の支援や授業の改善に活かしやすい。これらのことから、本校英語科では、1年生で TT を実施した。

2. TT の実際

今年度も1年生の4学級（各学級 30～31 人の学習集団）に対して教師が2人同時に指導する形をとった。週4回すべての授業を TT で行い、さらにうち1回は ALT 1 人を加えた3人での指導体制を整えている。

基本的な学習計画は T1 が行い、授業においても T1 が主導をして指導を行っている。T2 は主に次のような場面で役割を持った。

(1) 生徒への個別の指導と支援

- ・個別生徒の頑張りに対する声掛け
- ・ペアワークの補助
- ・つまずきなどの課題を抱える生徒への個別的な指導と支援(Chromebook などの機器の操作の補助を含む)

(2) T1 と生徒の実態の共有と授業改善

- ・どの場面つまずいている生徒が見られるか T1 と共有
- ・どのように次回以降の授業や支援に活かしていくか T1 と検討

(3) ふりかえりの分析、共有

- ・生徒のふりかえりを T1 と分析することで次回以降の指導や支援に活かす
- ・生徒が次年度以降も主体的に学習できるように特に

中学1年生で丁寧にふりかえりを T1 と共に見取る
(4) 評価

- ・T1 が作成したルーブリックの事前共有、検討
- ・パフォーマンステストの評価の妥当性の検討
- ・生徒の成果物(ライティング等)を T1 と分担して添削

T1 と協力してこれらの役割を果たすことで、生徒への丁寧な指導や、授業改善に繋がった。

3. TT の成果と課題

TT によって効果が高いと考えられたことは、個別の生徒のつまずきや頑張りをより多く把握し、指導に生かした点である。授業内容に対する生徒の誤解や疑問を教師が把握し、共有することで授業の改善に役立った。また、生徒のふりかえりの記述や、成果物を丁寧に見取り、他の生徒にも良い一例として全体に共有することで、個の意欲だけではなく、学級全体の学習意欲の向上に繋がられた。

また、英作文等の添削について T1 と T2 が協働で行うことで、生徒一人一人に細やかな指導をすることができた。特に英語に苦手意識がある生徒については、個々に寄り添った丁寧な指導が可能である。

また、評価について T1 と T2 が二人で検討することで、妥当性が高まった。

今後の課題としては、まずは T1 と T2 が同一歩調で授業が進められるように、準備や打ち合わせの時間を十分に確保することが必要である。また、4クラス間で指導や支援の差が生まれないように、職員の配置を工夫することや、各クラスの実践や支援を日頃から共有することも重要である。時には T2 が授業をリードする等、T1 と T2 の役割をクラス内で変えることで、異なる視点で生徒の支援や、T1 と T2 それぞれの指導改善やモチベーションの向上に繋げることができるかもしれない。様々な学習内容や学習形態によって、T1 と T2 がどのように役割分担をすると、効果的な指導ができるか、生徒の主体性に繋がるかについて様々な実践を重ねながらさらに検証していく必要がある。



写真3 教師2人が個別指導、支援を行う様子

今年度も、TT の指導体制を整え、授業実践を重ねることができた。TT の強みを生かした、生徒一人一人への細やかな指導を継続していきたい。